

正解のない読書から自律的読書へ 英語多読実践者のナラティブ探究

深谷素子

1. 研究の背景

英語多読研究において、大量インプットが多読授業の第一目的と考えられていることは論を俟たない。多読とは「たくさん読むこと」であり、Leather & Uden (2021)は“[e]xtensive reading (ER) involves reading large quantities of longer comprehensible texts, either fiction or non-fiction, for extended periods of time”と定義している(p. 1)。必然的に、多くの多読研究は、読書量と英語力の相関を調査することで多読の効果を明らかにしてきた(Cho & Krashen, 1994; Nishizawa et al., 2018)。近年では、多読実践者の言語データを分析する質的研究も増え、量的データの分析からは見えない学習者のきめ細かな反応や変化を、学習者自身の言葉＝ナラティブから捉えようとするナラティブ探究が、多読研究に広がっている(Judge, 2011)。ナラティブとは、小説におけるナラティブ同様「語り」を意味するが、英語教育研究の文脈では研究参加者の「語り」を指す。「研究参加者自身が自分の言葉で経験を語っているため、経験を生き生きと描写することができ」という(浦野他, 2016, p. 100)。やまだ (2007)は、ナラティブ探究とは「論理実証モードに対して物語モードによる研究である」と述べ、「それは事実かどうか」という「事の真偽・正誤」ではなく「人が人生にどのような意味を与えているかが問われる」とする(p. 65)。統計処理を伴う量的研究とは異なり、限られた数の参加者のナラティブを丁寧に聞き取り、記録し、分析するナラティブ探究は、特殊例外的な事例研究と見られがちだが、文学研究同様、ただひとりのナラティブが新たな知見をもたらす可能性がある。

2. 研究の目的

発表者がこれまでに行ったナラティブ調査は、多読授業において、Free Voluntary Reading (以下、FVR)の枠組みが学習者に及ぼす影響を明らかにしている。Krashen (2004)は“[FVR] means reading because you want to: no book reports, no questions at the end of the chapter. In FVR, you don't have to finish the book if you don't like it”と定義する(p. 1)。発表者は、42名の多読実践者が記録した1,176件の授業コメントをコーディングし、「武装解除」というテーマを抽出した。それは「(本が)合わなかったら途中でやめて本を変える、つらいと思ったらレベルを下げるといったことを『やってもいいんだ』という意識変化」を指す(深谷, 2024a)。また、4年間多読を継続した学習者2名に対するインタビュー調査では、教員にこれを読めと一度も強制されなかったことで、「本当に正解がないんだ」と確信し読書を楽しめたという反応が見られた(深谷, 2024b)。以上の調査結果は、教員からの無言の圧力がない自由な読書環境においてこそ、学習者は英語の本を自主的に大量に読むのではないかという仮説を浮かび上がらせる。そこで、本稿では「FVRという枠組みが多読実践者にどのような影響を与えるのか」という研究課題を設定した。

3. 研究の方法

調査参加者2名に半構造化インタビューを実施し、録音から文字起こしした言語データをコーディングした。調査時期は、2025年1月から2月である。調査参加者2名(白井さんと黒田さん、ともに仮名)は、熱心に多読に取り組んだこと、長期間にわたり多読を継続し(白井さん：大学3年間、黒田さん：高校3年間、大学1年間)100万語以上読んだこと、授業課題としての多読に加えFVRを経験していることを理由として選定した。インタビューから得られた言語データは、SCAT(Steps for Coding and Theorization)の手法で分析した。SCATとは、言語データを、<1> データの中の着目すべき語句、<2> それを言いかえるためのデータ外の語句、<3> それを説明するための語句、<4> 前後や全体の文脈を考慮して浮かび上がるテーマ、構成概念という、4つのステップを踏んでコーディングし、抽出されたコードを繋ぎ合わせて、言語データに潜むストーリーを浮かび上がらせ、さらにそのストーリーからナラティブの理論化を試みるという分析手法である(大谷, 2019)。

4. 言語データの分析と考察：「享受の快」

2名の調査参加者が、FVRの枠組みでの多読経験について語った言語データから抽出されたコードのうち、本稿で特に注目したいのが「享受の快」である。例えば、白井さんは、大学1年次に多読を始めたときは「ずっと作業みたいな感じだった」のが、2年次後期に Magic Tree House シリーズと出会い「多読の効果どうこうっていうよりもお話が面白いと思って」多読を継続できたという。多読の本は途中でやめてもいいのだと知り、嫌いな本を読むのをやめ、好きな本を読み始めたところ、多読の時間は楽しい時間、リラックスできる時間になったという。ここには「目的を達成するための手段ではない、ただ楽しい読書」が示唆されている。一方、黒田さんは、高校1年の「英語表現」という授業内で、電子書籍サイト Xreading を使って多読を開始したのだが、やはり「強制的に読まされたというのは全くない」点を強調する。「空いている時間があつたので、暇だから読むみたいな感じ」で続けていたら「3年次には長いものが読めるようになったという実感」があり、「ただ読みたいから読むという意味で能動的にできていた」と語る。これも、目的や手段とは切り離された読書だと解釈できる。

國分 (2023)は、『判断力批判』第 39 節「感覚の伝達可能性について」を引き、カントが「快適なものがもたらす快を『享受の快(Lust des Genusses)』と呼び、快適なものをはっきりと享受＝嗜好の概念と結びつけ」たと指摘する。さらに「享受の快」はその他三つの快（「善いものがもたらす快」「崇高なものがもたらす快」「美しいものがもたらす快」）とは異なり「いかなる目的ももたず、いかなる合目的性もなきままに、何かを享受＝嗜好することで得られる快」であり、「目的を持ち込んだ途端、享受の快は享受の快ではなくなる」と説明している (p. 148)。白井さんと黒田さんが、FVR の枠組みで体験した読書は、この「享受の快」をもたらしたと言えないだろうか。むろん、100 万語達成、あるいは英語力向上といった目標設定から始まった多読ではあるが、やがてそれは「目的達成のためではない、ただ読みたいから読む読書」に変わっていった可能性が推測される。

この点を踏まえて、さらに 2 人のナラティブに目を向けてみたい。白井さんは、FVR の枠組みでの読書を「一人旅」と表現し、土日はスマホを排除して公園で本を読んでいたという。「作業じゃないんです、好きで読んでるだけなんで」という言葉は、「目的や手段から自由な読書」の境地を示している。一方、黒田さんは、高校ではあれほど潤沢にあった「暇＝時間」が大学では減ったため、「頑張って読まなければならないという負荷、圧力から、読書が強制されているように感じられた」と語る。さらに、大学の多読授業では、学期末にブックレポートが課され、それが成績評価の対象となるので、「読みたいから読む」というところからは離れてしまったと指摘する。授業と評価は切り離せないものだが、レポートや成績といった「目的」のための「手段」として意識されたとたん、読書から「享受の快」が失われた可能性を、黒田さんのナラティブは示唆している。また、「享受の快」を生む FVR の枠組みにおいて「自由な時間」が必須要件であることも読み取れる。

大学での多読授業で黒田さんが「享受の快」を感じたと考えられるのは、自分の興味関心にあった本を自ら選んで読んだときである。Burton Malkiel's *A Random Walk down the Wall Street* (ネイティブ大学生向け、原著の解説本) は、レポートのために読んだにもかかわらず、自分の趣味である投資の本だったことから「これは本当に読んでみたいと思っていた本だったので『しめた』っていう感じで読んだ」という。「しめた」という言葉は、たとえ授業の課題、つまり「目的」を達成するための「手段」としての読書であっても、内容が自身の関心と強く結びついていれば、内的動機づけが喚起され「享受の快」につながる可能性を示している。

5. 結論と教育現場への示唆

以上の調査結果から、FVR の枠組みは、目標や目的に縛られない自律的読書へと多読実践者を促し「享受の快」をもたらし得ることが確認された。多読を始めた当初は目標や目的が明確にあったとしても、成績やレポートに縛られず自由に選書し読書する環境が整っていたことで、その読書は彼らに「享受の快」をもたらし、多読の長期継続を可能にしたと考えることができる。もちろん、本調査結果は、FVR の枠組みを提供すれば、誰もが「享受の快」を得て多読を継続できることを保証するものではないが、目標や目的がいつのまにか不要になり、ただ読書を楽しむ境地に達する読者が存在し、彼らが FVR の枠組みでそれを経験したことは確かだろう。教員は、同様の経験をえられるような環境を学習者に提供することを諦めるべきではないだろう。

付記

本稿におけるデータ使用については、倫理審査を経たのちに調査参加者の同意を得ている。

参考文献

- Cho, K., & Krashen, S. (1994). Acquisition of vocabulary from the Sweet Valley Kids series: Adults ESL acquisition. *Journal of Reading*, 37, 662-667.
- 深谷素子 (2024a). 「彼らはどのように本を読んでいるのか：多読授業受講者のナラティブ探究」 *JAILA Journal*, 10, 81-95. doi: https://doi.org/10.57359/jailajournal.10.0_81
- 深谷素子 (2024b). 「二つの異なる世界の境界線上で観察し熟考し決断するために：教養教育の一環としての多読授業」『第 96 回全国大会 Proceedings』（日本英文学会）
- Judge, P. B. (2011). Driven to read: Enthusiastic readers in a Japanese high school's extensive reading program. *Reading in a Foreign Language*, 23(2), 161-186.
- カント, E. (1964/2024). 『判断力批判 (上)』篠田英雄 (訳), 岩波文庫
- 國分功一郎 (2023). 「享受の快—嗜好品、目的、依存症」『新潮 2023. 7』, 125-157.
- Krashen, S. D. (2004). *The power of reading: Insights from the research* (2nd ed.). Libraries Unlimited.
- Leather, S., & Uden, J. (2021). *Extensive reading: The role of motivation*. Routledge.
- Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Ichikawa, Y. (2018). Benefits of long-term extensive reading program in English as a foreign language. *Language, Individual & Society*, 12, 9-23.
- 大谷尚 (2019/2023). 『質的研究の考え方：研究方法論から SCAT による分析まで』, 名古屋大学出版会
- やまだようこ (編) (2007). 『質的心理学の方法：語りをきく』, 新曜社